

清原宣賢加点の経書における「声」注記

坂 水 貴 司*

1. 本稿の目的と研究の方法

1.1 本稿の目的

文献から過去の言語の音調を推定するためには、文献に記載されたさまざまな注記が使用される。

漢籍の一種である経書での音調注記としては、もっぱら文字の周囲に点を打って音調を示す「声点」が利用される(図1)。日本漢字音研究ではこの豊富な声点を活用し、声調体系を帰納的に明らかにしてきた(沼本克明 1982 第2部第4章など)。

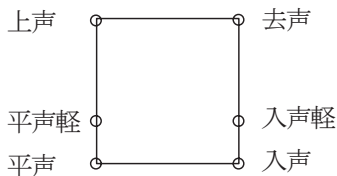


図1 六声体系の声点の模式図

ところが、古代アクセントから近代アクセントへの体系変化(金田一春彦 1955: 29)によって、声点を示す音調と実際に発音される音調にずれが生じるようになる(桜井茂治 1958: 75)。さらに経書にはその後次第に声点が加点されなくなるため、アクセント体系変化以後において経書がどのような音調で読まれたのかということについては明らかでない。

しかし、室町時代の博士である清原宣賢(1475-1550)が加点した経書には、「声」とい

う用語で音調を示したと思われる例(以下、「『声』注記」とする)がある。古文献に豊富に加点されてきた声点とは異なり、少数の注記であるため音調の体系全体を明らかにすることは難しいものの、「声」注記の検討を通して経書の音調の一端を明らかにすることができると思われる。

本稿は清原宣賢加点の経書を対象とし、「声」注記が音調を示すための注記であることを確認した上で、次の諸点を指摘することを目的とする。

- ・経書では中国語中古音における全濁上声字の音調が上昇調に変化せず、高平調を維持した可能性があること。
- ・漢字2字以上で漢語をなすとき、単字の声調は維持されず、漢語アクセントとして発音されていた可能性があること。
- ・和語の中には古い終止形のアクセントを維持するものがあること。

1.2 研究の方法

以上の目的を達成するため、本稿では次のような方法をとる。

まず、清原宣賢が使用した「声」注記を整理し、「声」注記が音調を示す注記であったことを確認する。

次に、「声」注記が示す音調(以下、「『声』注記音調」とする)を明らかにすることを目指す。しかし、「声」注記音調のみを明らかにしても、用例が少ないために「声」注記音調の性質は理解できない。そこで、先に「声」注記が

* 広島経済大学教養教育部助教

付された語（以下、「被注語」とする）の、アクセント体系変化以前の時代における音調を調査する（これによって得られた音調を「原音調」とする）。その後原音調と「声」注記音調とを対照し、「声」注記音調の性質を明らかにする。

漢語は中国語の声調を借用し、古くは字音形態素（以下、単に「字」という用語で字音形態素を示すこととする）ごとに特定のピッチパターンをもつ音調の体系を持っていた。日本漢字音研究ではこの段階を漢字音の「声調」と呼ぶことが一般化している。その後声調は和語のアクセント体系と同化し、漢語アクセントをなすようになる。

本稿で対象とする「声」注記が漢語に付される場合、声調の段階を示すのか漢語アクセントを示すのかは現段階で明らかでない。また和語にも「声」注記が付される例もある。このような状況であるため、声調やアクセントという語を一括して「音調」と呼ぶことがある。

2. 清原宣賢書写本における「声」注記の用法

2.1 『日本書紀抄』『伊勢物語惟清抄』における「声」注記の用法

本稿で主として扱うのは経書における「声」注記である。しかし、経書以外の文献にも「声」注記が出現することがある。

金田一春彦（[1974] 2005b: 210-211）では、「声」という術語で日本語のアクセントを記述する文献として、宮内庁書陵部所蔵の清原宣賢『日本書紀神代抄』を取り上げる。金田一は当該文献において「声」字に「シヤウ」という振り仮名がついていることを指摘し、当該の注記を「シヤウ」と読むことを示している。

金田一の取り上げた『日本書紀神代抄』は後世の版本と思われるため、『日本書紀抄』清原宣賢筆大永6-7（1526-1527）年写本天理大学附

属天理図書館蔵本によって引用すると、次のとおりである¹⁾。

假令・大和國・此^{ヤマトノクニ}声^{シヤウ}・ヤマトウタノ^{シヤウ}声也・
大和瓜^{ヤマトウリ}・此^{シヤウ}声^{シヤウ}・ヤマトフミノ^{シヤウ}声也・ヤマト
歌ト云^{定家卿説}声ハ・山跡ノ義也・ヤマトフミト云
声ハ^{六条家説}・山戸山止ノ義也・（上4オ6-7）

この注は「ヤマト」について、「ヤマトウタ」では「大和國」と同じ「声」で、「ヤマトフミ」では「大和瓜」と同じ「声」で読むことを示したものである。

また、『伊勢物語惟清抄』清原宣賢筆天文17（1548）年写本天理大学附属天理図書館蔵本には「ヤマトウタ・私云・大和國・此^{シヤウ}声ニ・讀タマヘリ」（53オ2）という記述がある。『伊勢物語惟清抄』は「逍遙院」（= 三条西實隆、1455-1537）の大永2（1522）年からの講義を抄したものである。「讀タマヘリ」という待遇表現から、ここで「ヤマトウタ」を「大和國」と同じ「声」で読んだ人物は三条西實隆であると考えられる（片桐洋一 1979: 32）。しかし、「私云」とあることから、注記自体は宣賢自身が付したものであることがわかる。

以上の注記例は「ヤマト」の音配列が共通していることから、音調²⁾を注記した例であると考えられる。

一方で『伊勢物語惟清抄』には次のような記述もある。

天福本・アブナ^{シヤウ}／＼ト・聲^{シヤウ}ヲサセリ・タ
トヒ・定家自筆ノ本タリトイフトモ・聲^{シヤウ}
ヲハ・後人ノ・サス事モ・有ヘケレハ・必
聲^{アウナ／＼〔朱〕}ヲ・信シカタシ マツ・アブナ^{シヤウ}／＼ト・
ヨミ來レル也・念此ナル心也（59ウ7-9）

この引用箇所は「アブナ／＼」（「／＼」は2字分の踊り字を示す）と「アウナ／＼」（アウナ

へ)」という読み方の相違を、「聲」という語によって説明したものであり、濁点の有無を問題にしている箇所である。濁点は濁声点（濁音と音調を同時に示す声点）から成立したと考えられているので（沼本克明 1997: 895-932, 沼本克明 2013: 163-204）、用語「聲」で声点（の末裔の濁点）を表したものと考えられる。

以上より、清原宣賢は「声」という用語によって、「音調」と「声点」を示したものと考えられる。これは金田一春彦（[1974] 2005b: 209-212）で示された用法と一致する。

2.2 経書における「声」注記

清原宣賢加点の経書における「声」注記は、次の延べ9語に付されたものである。用例は、『論語』京都大学附属図書館清家文庫蔵本と『孝経秘抄』大東急記念文庫蔵本に認められる。『孝経秘抄』の例は、いずれも『孝経秘抄』所載の『古文孝経』の例である。

(a) 漢語に対する注記

^{サン}三^{ネン}年^{ヲヨ}に及^{コロホヒ}バン^[宋:タイ] 此^コに [[「此」字は本文マ]

マ] (『論語』4ウ7)

「声」注記 ^{サンサン}三算此声

^チ父^ハを^{シウ}嚴^{スル}は [於] ^{ヘイ}天^ニ配^{スル}スル (より) ^ハ大ナル^ハ莫^シ (『孝経秘抄』59オ3)

「声」注記 ^{ヘイ}配^{スル}・^{ヘイ}拜^{スル}・^{ヘイ}此^{スル}声^也・

^{シン}晋^{ブン}の^{コウ}文^{イツハ}・^[宋:ウ]公^ハは ^{コウ}譎^{ツテ} [而] ^{タマ}正^スシカラ^ス不^ス。

(『論語』18オ2)

「声」注記 ^{シン}花^ノ心^此声

以^テ其^ノ親^ヲを^{ツカウマツ}事^ル (『孝経秘抄』56ウ5)

「声」注記 ^{シン}親^テ・^{シン}手^針・^{ヘイ}此^{スル}声^也・^{ヘイ}木

^ノ心^ニ・^{ヘイ}此^{スル}声^ニ不^ス讀^ス

^{レイ}民^ニに^{シユン}禮^ヲ・^[清]順^ヲを^{ラン}教^{フル}には^ハ・[于] ^{テイ}弟^{ヨリ}ヨリ^ヨ善^キは^ハ莫^シ (『孝経秘抄』73ウ4)

「声」注記 ^{テイ}弟^ノ・^{テイ}其^ノ人^ノ・^{テイ}其^ノ人^ノ・^{テイ}此^{スル}声^也

^{シン}進^{タイ}・^[清]退^ト・^ト度^{アル}可^シ (『孝経秘抄』66オ6)

「声」注記 ^{シン}進^テ・^{シン}手^針・^{ヘイ}此^{スル}声^也・^{ヘイ}木

^ノ心^ニ・^{ヘイ}此^{スル}声^ニハ^ハ・^{ヘイ}不

讀^ス・

^{サイ}洒^{サウ}・^{ヨウ}掃^{タイ}・^{シン}應^{タイ}・^[清]對^{アタ}・^{アタ}進^{タイ}・^[清]退^{アタ}に^{アタ}當^ツて^ハ

(『論語』41オ1)

「声」注記 ^テ手^針此^{スル}声

^{アラソ}諸^侯・^{アラソ}争^フ臣^五・^{アラソ}人^有ト^キハ

(『孝経秘抄』87オ6)

「声」注記 ^シ諸^侯・^シ書^侯・^シ侯^ノ・^{コウ}龜^ノ・^{コウ}甲^此声^也

^{コフ}侯^人ニ^{コフ}物^ヲ請^フ 此^{スル}声^非

也 (見^セ消^チ「^{コフ}侯^ヲ鳥

^ノ鴻^ノ声^ニヨム^ハ・^{コフ}非

也)]

(b) 和語に対する注記

^{コレ}之^ヲ [イ、之^ヲを] ^{ヘイ}悖^レ・^{ヘイ}禮^ニと^イ謂^フ

(『孝経秘抄』64オ6)

「声」注記 ^{イフ}謂^フ・^{イフ}揖^ヲスル[・]此^{スル}声^也・

^{イフ}繩^ニテ^物ヲ^{ユフ}・

此^{スル}声^ニア^ラス[・]

これらの例は、いずれも被注語と「声」注記の音配列が等しい点で共通する。たとえば、被注語「三年」と「声」注記「算」はともに「サン」という音配列が共通している。また和語の被注語「謂フ」と「声」注記「ユフ」は、[iu] ([iɸu] に由来するものも含む) が融合して鎌倉時代以降 [ju:] に変化するため (亀井孝 [1969] 1986: 46-48, 小林芳規 [1971] 2021: 282-283, 五島和代 2000など)、やはり同じ音配列をもつと言える。

これらの「声」注記は、いずれも「声点」の意で解すると意味が通らない。2.1で見た「声」という用語の用法 (音調または声点) のうち、本稿が対象とする経書の「声」注記はいずれも音調を注記したものと考えられる。

3. 被注語の原音調の推定

3.1 原音調推定の手続き

「声」注記音調を理解するための前段階として、被注語の原音調を推定する。「声」注記が付される語は漢語と和語に分けられ、原音調の推定方法は漢語と和語で異なる。

漢語について、経書の漢語は漢音で読まれることが知られている(築島裕 1977: 39)。そのため原音調は、漢語を構成する各字の漢音声調を調査することで得られる。ただし語によっては単字声調の組み合わせとは異なる場合もあることが想像されるため、可能な限り同じ文脈、同じ語の声点加点例を求めることが望ましい。そこで具体的な手順として、予備的に『広韻』『韻鏡』によって単字の中国語中古音の情報を調査した上で、次の図2のような手順をとる。

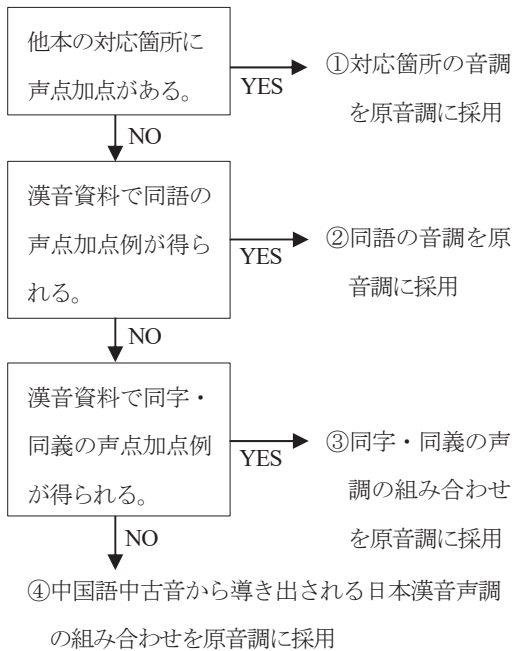


図2 漢字音の原音調の認定手順

まず同一本文の他本を調査する。経書は本稿で扱う文献以外にも、同一本文・別訓点の他本が存在する。本稿で対象とする文献の「声」注

記が付された箇所について、他本の対応箇所で声点加点があった場合には、その声点から導かれる音調を原音調として採用する(図2・①)。

対応箇所の声点加点が見つからなかった場合には、漢音資料で同じ語の声点加点例を探す。もし同じ語の声点加点例があれば、それから導かれる音調を原音調として認定する(図2・②)。

漢音資料で同語の声点加点例が見つからない場合、漢音資料で同字かつ同義の声点加点例を探す。これは、意味が異なれば声調が異なる場合があるためである。漢音資料で同字・同義の声点加点例が得られれば、その組み合わせから導かれる音調を原音調として認定する(図2・③)。

①～③において加点される声点に揺れがある場合には、ひとまず中国語中古音とよく対応するもの(図3)を原音調として選択する。

中古音	中国語中古音の頭子音 ³⁾			
	全清	次清	次濁	全濁
声調	平声		上声	
平声	平声輕		平声	
上声	上声			去声
去声	去声			
入声	入声輕			入声

図3 中国語中古音と日本漢音声調(調)の対応(沼本克明 1986: 52により作成)

漢音資料で同字・同義の声点加点例が得られない場合には、中国語中古音と日本漢音との対応を考慮し、導かれる漢音声調の音調の組み合わせを原音調とする(図2・④)。ただし本稿で扱った例は①～③の方法で推定可能であり、④を実際に適用した例はない。

また和語の場合には、院政・鎌倉期のアクセントを原音調として認定する。

古文獻に見られる声点の示す調値は、金田一春彦(1951: 699)にしたがって表1のように

表1 声点と調値との関係

声点	音調型	1拍	2拍
平声	低平調	L	LL
平声輕	下降調	F	HL
上声	高平調	H	HH
去声	上昇調	R	LH
入声輕	高平調	H	HH
入声	低平調	L	LL

※金田一春彦(1951: 699)により私に作成。L = 低拍, H = 高拍, R = 上昇拍, F = 下降拍を示す。

推定する(表1以外の対応をとる声点の場合には、その都度説明を加える)。

以上の手続きで被注語の原音調を推定する。

3.2 各被注語の原音調の推定

3.2.1 「三年」の原音調

まず「三」「年」それぞれの中国語中古音の情報を示し、両字に期待される漢音声調を推定する。「三」「年」の中国語中古音の情報は次のとおりである。

三：心母(全清)一等談韻・平声
心母(全清)一等闕韻・去声
年：泥母(次濁)四等先韻・平声

中国語中古音からは、「三」は平声輕または去声、「年」は平声が期待される。

本稿で「声」注記が見られた「三年」は『論語』の例である。しかし『論語』他本の該当箇所には声点加点例がなく、同語の声点加点例も得られないため、同字・同義の加点例を求める。

「三年」の「三」は数詞を意味する例である。漢音資料において、数詞を意味する「三」には次のような声点加点例が認められる。

(a) 平声輕点加点例

『大慈恩寺三藏法師伝』延久・承暦頃(1080年頃) A 種点興福寺藏

二^(去)三^(平輕)年の(①101), 三^(平輕)
峡^(入輕)に(①116)

『大慈恩寺三藏法師伝』承德3(1099)年

C 種点興福寺藏

三^(平輕)百^(入輕)(⑧279), 三^(平輕)千
(⑧279・286), 三^(平輕)德^(入輕)(⑧
288), 三^(平輕)體^(上)ヲ(⑨122),
三^(平輕)五^(上)(の)(⑨262), 三^(平輕)
両^(上)日(⑨352), 三^(平輕)川^(平)ヲ
(⑨368), 三^(平輕)江^(平)九^(上)河^(平)
(⑩184), 三^(平輕)善^(去)(の)(⑩245)

『大慈恩寺三藏法師伝』承德3(1099)年

頃 D 種点興福寺藏

二^(去)三^(平輕)(を)(⑧264), 三^(平輕)
両^(上)人^(平)(を)(⑧327), 三^(平輕)
玄^(平)(を)(⑨101), 二^(去)旬三^(平輕)
旬(を)(⑨203), 三^(平輕)両^(上)日^(入輕)
(⑨350)

『群書治要』経部鎌倉中期清原教隆点宮内
庁書陵部藏

三^(平輕)-辟(⑥125)

(b) 去声点加点例

『大慈恩寺三藏法師伝』承德3(1099)年

C 種点興福寺藏

三^(去)光^(上)(⑦34⑧401)

『大慈恩寺三藏法師伝』承德3(1099)年

頃 D 種点興福寺藏

三^(去)德^(入)(⑧288), 三^(去)五(⑨262)

これによれば、平声輕点の加点例を中心とし、例外的に去声点加点例が見られるという状況である。数詞としての「三」の漢音声調は平声輕であったと考えられる⁴⁾。

次に「年」字は漢音資料において、以下のようないかなる声点加点例が認められる。

(a) 平声点加点例

『大慈恩寺三藏法師伝』承德3(1099)年

C 種点興福寺蔵

同^(平)年^(平)(⑦84⑨280), 萬^(去)年^(平)
 (の)⑦175), 往^(上)年^(平)ニ(⑦312),
 遇^(平)年^(平)ニ(⑧413), 年^(平)壽^(去)
 (⑩139)

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3(1099)年

頃 D 種点興福寺蔵

萬^(去)年^(平)ノ(⑨82)

『遊仙窟』康永3(1344)年点, 醍醐寺蔵

二-千-年^(平)(7)

(b) 平声軽点加点例

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3(1099)年

C 種点興福寺蔵

歳^(去)年^(平軽)ヲ(⑨359)

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3(1099)年

頃 D 種点興福寺蔵

頃^(平)年^(平軽)(より)(⑨386)

平声点・平声軽点の両者が認められるものの、
 用例は平声点加点例に集中するため、「年」の
 漢音声調は平声であると推定される⁵⁾。

以上、「三」の漢音声調は平声軽、「年」の漢
 音声調は平声と考えられることから、「三年」
 の原音調は HLLL と推定される。

3.2.2 「配スル」の原音調

中国語中古音の情報は次のとおりである。

配：滂母(次濁)一等隊韻・去声

中国語中古音との対応を考慮すると、「配」の
 漢音声調は去声であることが期待される。

『古文孝経』の他本では、次のとおりに対応
 している。

『古文孝経』建治3(1277)年金王磨点三
 千院蔵

[於]天に配^ハスルヨリ [イ, 配す
 るより]大(なる)は莫シ。(235)

『古文孝経』仁治本鎌倉中期点杏雨書屋蔵
 [於]天に配^ハスルヨリ大(なる)
 は莫シ。(330)

三千院本・仁治本の両本で去声点が加点され
 ており⁶⁾, 漢音声調は去声と考えられる。

当該の例は漢語サ変動詞である。アクセント
 体系変化以前の鎌倉時代では、連体形が4拍の
 漢語サ変動詞の場合、去声の字音形態素に「す
 る」が後続するとき、その連体形のアクセント
 は LHHH であることが指摘されている(金田
 一春彦[1964]2005a:471)。

以上を勘案すると、「配スル」の原音調は
 LHHH であったと推定される。

3.2.3 「晋」の原音調

中国語中古音の情報は、次のとおりである。

「晋」：精母(全清)三等震韻・去声

中国語中古音との対応から、漢音声調は去声で
 あると考えられる。

「晋」も、『論語』他本の対応箇所にも声点加
 点がない。しかし次のように、本稿の「晋」と同
 義である国名の「晋」には、漢音資料において
 去声点加点例が確認される。

『蒙求』長承本平安中期朱点東京国立博物
 館蔵

晋^ハ宣^(平軽)狼^(平)顧^(上)(51), 晋^(去)
 恵^(去)聞^(平)慕(328), 晋^(去)武^(上)
 傷^(平軽)指^(上)(352)

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3(1099)年

C 種点興福寺蔵

晋^(去)の右^(上)軍^(平)将^(平軽)軍^(平軽)(⑦
 53), 晋^(去)后^(去)(⑦85), 晋^(去)代^(去)
 (の)⑧233), 晋^(去)朝^(平)ニ(⑨213)

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3(1099)年

頃 D 種点興福寺蔵

晋^(去) 帝^(去) の (⑨434)

『春秋経伝集解』清原直隆・清原俊隆加点
鎌倉中期点宮内庁書陵部蔵

晋^(去) の國に (⑬869b)

以上より「晋」の漢音声調は去声であると推測される。そのため、原音調は LH であると考えられる。

3.2.4 「親」の原音調

中国語中古音の情報は次のとおりである。

親：清母（次清）三等真韻・平声
清母（次清）三等震韻・去声

中国語中古音との対応から、漢音声調は平声軽または去声であることが期待される。

「親」は『古文孝経』他本の対応する箇所の声点加点がない。また単字であるため同語か否かという判断が難しい。そのため、漢音資料における同字・同義の音注加点を求める。

当該箇所の「親」は「おや」という意味である（栗原圭介 1986: 218-219）。「おや」「親類」などの意味で名詞的に使用された例については、次のような声点加点例が認められる。

(a) 平声軽点加点例

『蒙求』長承本平安中期朱点東京国立博物館蔵

軻^(平軽) 親^(平軽) 断^(上) 機^(平軽) (134)

『群書治要』経部鎌倉中期清原教隆点宮内庁書陵部蔵

親^(平軽) を親す (⑧25), 親^(平軽) (の)
[之] 辟を (⑧141)

『大慈恩寺三蔵法師伝』延久・承暦頃 (1080年頃) A 種点興福寺蔵

親^(平軽) を損テ、道に入り (①39)

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3 (1099) 年
C 種点興福寺蔵

親^(平軽) 故^(去) ヲ (⑨344)

(b) 平声点加点例

『大慈恩寺三蔵法師伝』延久・承暦頃 (1080年頃) A 種点興福寺蔵

懿^(去) 親^(平) なるを (①119)

『本朝文粹』鎌倉中期点久遠寺蔵

親^(平) 老 (い) ヌレは (⑥49), 親^(平)
を譲ル・(⑥754), 親^(平) を思フ [之]
志に (⑥767), 親^(平) 老^{ヲイ} ンタリ・(⑧
746)

平声点の加点例も一定数認められるものの、期待される平声軽点の用例がまとまって確認されるため、ひとまず「親」の漢音声調は平声軽であると考えておく。そのため、原音調は HL であると推定される。

3.2.5 「弟」の原音調

中国語中古音の情報は次のとおりである。

弟：定母（全濁）四等霽韻・上声
定母（全濁）四等霽韻・去声

中国語中古音との対応から、漢音声調は上声または去声であることが推測される。

この例は、『古文孝経』他本での対応箇所に声点加点例がある。次のとおりである。

(a) 上声点加点例

『古文孝経』建治3 (1277) 年金王磨点三千院蔵

[于] 弟^(上) より善 (き) は莫し (308)

『古文孝経』仁治本鎌倉中期点杏雨書屋蔵

[于] 弟^(上) より善きは莫し (449)

『古文孝経』永仁5 (1297) 年写本宮内庁書陵部蔵

[于] 弟^(上) より善きは莫し (33才4)

(b) 去声点加点例

『古文孝経』元徳2 (1330) 年写本宮内庁

書陵部藏

〔于〕弟^(去)より善(き)は莫(し) (413)

『群書治要』経部所収『孝経』鎌倉中期清
原教隆点宮内庁書陵部藏

〔於〕悌^(去)ヨリ善キハ莫シ。(9)132)

三千院本・仁治本・永仁本は「弟」字に上声
点が加点される。一方、元徳本・『群書治要』
所収本では去声点が加点される（ただし『群書
治要』所収本の本文の字は別字である）。

漢音において全濁上声字は去声化することが
多いもの（沼本克明 1986: 142）、経書では去
声化する割合が低いことが指摘されている
（佐々木勇 2009a: 860）ため、ひとまず「弟」
字の漢音声調は上声であると推定する。よって、
「弟」字の原音調は HH であったと推定される。

3.2.6 「進退」の原音調

中国語中古音の情報は次のとおりである。

進：精母（全清）四等震韻・去声

退：透母（次清）一等隊韻・去声

中国語中古音との対応から、「進」「退」両字の
漢音声調は去声であることが推測される。

本稿で扱う「進退」の例は『論語』『孝経秘
抄』の両者に出現するものである。『論語』の
対応箇所には加点がないものの、『古文孝経』
の対応箇所には次のような加点例がある。

『古文孝経』建治3（1277）年金王磨点三
千院藏

進^(去)-退^(去)度^(去)アル [イ、度ある]
可し (270)

『古文孝経』仁治本鎌倉中期点杏雨書屋藏

進^(去)-退^(去)度^(去)アル [イ、度ある]
可し (386)

これらの例から、「進」「退」両字の漢音声調

は去声であると言える。そのため、「進退」の
原音調は LHLH と推定される。

3.2.7 「諸侯」の原音調

中国語中古音の情報は次のとおりである。

諸：章母（全清）三等魚韻・平声⁷⁾

侯：匣母（全濁）一等侯韻・平声

中国語中古音と漢音との対応を考慮すると、
「諸」字は平声軽、「侯」は平声であることが期
待される。

他本の対応箇所には声点加点がなく、他の漢
音資料における同語の用例も見当たらないため、
同字・同義の例を漢音資料で求める。

まず「諸」字は漢音資料で次のように現れる。

(a) 平声軽点加点例

『大慈恩寺三蔵法師伝』延久・承暦頃（1080
年頃）A 種点興福寺藏

諸^(平軽)美^(上)を (146), 諸^(平軽)公^(平軽)
(178)

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3（1099）年
C 種点興福寺藏

諸^(平軽)車^(平) (7)182)

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3（1099）年
頃 D 種点興福寺藏

孟^(去)諸^(平軽) (10)215), 諸^(平軽)州 (7)
219, (10)171)

(b) 平声点加点例

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3（1099）年
C 種点興福寺藏

孟^(平軽)諸^(平) (10)215)

(c) 上声点加点例

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3（1099）年
C 種点興福寺藏

諸^(上)王^(上)卿^(平軽)相^(去) (7)227)

このほか天理大学附属天理図書館蔵因空自筆

本『朗詠要抄』延慶2(1309)年因空伝授本において、「諸侯」の「諸」に付された節博士が示す音調はFであるという(加藤大鶴2022:8)。一方声点はHを示すものの、下降調をとらえた可能性が指摘されている)。期待される平声軽点の用例がまとまって得られるため、ひとまず「諸」字の漢音声調は平声軽であると推定する。

また「侯」字は漢音資料において次のように加点される。

(a) 平声点加点例

『蒙求』長承本平安中期朱点東京国立博物館蔵

雅^(平軽) 齒^(上) 先^(平軽) 侯^(平) (104),
周^(平軽) 侯^(平) 山^(平軽) 疑^(入軽) (107)

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3(1099)年
C種点興福寺蔵

王^(平) 侯^(平) (⑦344), 安^(平) 城^(平) 侯^(平)
姚^(平) 嵩^(去) (⑧310), 侯^(平) 甸^(去)
ニ (⑨334), 侯^(平) 王^(平) ノ (⑩239)

(b) 去声点加点例

『大慈恩寺三蔵法師伝』承元4(1210)年
朱点京都大学人文科学研究所松本文庫蔵
安^(平) 城^(平) 侯^(去) の (⑧252)

平声点, 去声点の加点例が確認されて揺れるものの, 中国語中古音との対応から期待される平声点の加点例が中心的であると言える。そのため, 「侯」の漢音声調を平声と推定する。

以上より, 「諸」字の漢音声調は平声軽, 「侯」字の漢音声調は平声であると考えられる。そのため, 「諸侯」の原音調はFLLであると推定される。

3.2.8 「謂フ」の原音調

和語である「謂フ」は, 院政・鎌倉時代のアクセントによって原音調を推定する。

「謂フ」は2拍動詞第1類に属する⁸⁾。2拍

動詞第1類の院政・鎌倉時代のアクセントは, 終止形HL, 連体形HHである。対応する用例は次のとおりである。

(a) 終止形の例

『類聚名義抄』図書寮本宮内庁書陵部蔵

語 イ^(上) フ^(平) (90-3), 謂 イ^(上) フ^(平) (90-4)

『類聚名義抄』観智院本天理大学附属天理図書館蔵

言 イ^(上) フ^(平) (法上25オ4)

『涅槃講式』大慈院本南北朝期写本東京大学国語研究室蔵

滅スト^(斗十) 言フ^(斗十) (439-2)

(b) 連体形の例

『類聚名義抄』観智院本天理大学附属天理図書館蔵

言 イ^(上) フ^(上) 心ハ (法上25オ4)

『涅槃講式』大慈院本南北朝期写本東京大学国語研究室蔵⁹⁾

云ウカ^(斗斗斗) 如シ^(斗十) (410-1)

これらのアクセント資料から, 「謂フ」の原音調は終止形HL, 連体形HHであると推定される。

4. 「声」注記音調の推定

4.1 「声」注記音調の推定の手続き

続いて「声」注記音調の推定を行う。

「声」注記に使用される語は, 漢語であっても和語のアクセント体系になじんだものであると推測される。和語「謂フ」の音調を漢語「揖」で注した例があるほか, 「手針」のように和語「手」と漢語「針」の複合語が「声」注記に使用される例もあり, 「声」注記の漢語が和語と異なる特殊な音調を有していたとは考えにくい。

そのため, 「声」注記に使用された語のアクセント体系変化後のアクセント(室町~江戸ご

ろのアクセント)を「声」注記音調と認定する。

体系変化後のアクセントを推定するために秋永一枝ほか(1997)により用例を検索する。その上で、影印本でアクセント体系変化後の用例を確認できたものに基づいて「声」注記音調を推定する。

秋永一枝ほか(1997)でアクセント体系変化前の用例しか得られなかった場合には、体系変化前の用例を確認した上で、そのアクセントを元に体系変化後のアクセントを推定して、「声」注記音調として認定する。

秋永一枝ほか(1997)で用例が得られないもの(主に漢語)については、院政・鎌倉時代の漢音・呉音声調を文献によって確認した後、その声調から体系変化後のアクセントを推定し、「声」注記音調として認定する。

以上の手続きによって各語の「声」注記音調を推定する。

4.2 各語の「声」注記音調の推定

4.2.1 「三年」の「声」注記音調の推定

「三年」には、「三算此声」(『論語』4ウ7)という「声」注記が付されている。

「算」は『類聚名義抄』観智院本天理大学附属天理図書館蔵本で「サ^(平)ム^(平)」(僧上34ウ4)、『色葉字類抄』尊経閣文庫蔵前田家本に「サ^(平)ン^(平)」(下48オ7)とあり、院政・鎌倉時代のアクセントはLLであると考えられる。体系変化後の確例は認められないものの、早稲田語類2拍名詞第3類相当の語と位置づけられており(秋永一枝ほか1998:104)、その変化は「院政・鎌倉LL>室町・江戸HL>現代京都HL」であると推定される。室町時代の「算」のアクセントはHLであったと考えられる。

「年」には「声」注記が付されていないためその部分を「×」で示すと、「三年」の「声」注記音調はHL××であると推定される。

4.2.2 「配スル」の「声」注記音調の推定

「配スル」の「配」には、「拜ヲスル」(『孝経秘抄』59オ3左傍)の音調と等しい旨の「声」注記が付されている。

「拜」は、『色葉字類抄』尊経閣文庫蔵前田家本の「拜」字下方に「ハ^(平)イ^(上)」(上24ウ6)という声点加點があり、院政・鎌倉時代にはLHであったと推測される。これは2拍名詞第4類に相当するもので、「院政・鎌倉LH>室町・江戸LH>現代京都LH」のように変化することが期待される¹⁰⁾。

また「拜」単独ではないものの、『補忘記』貞享4(1687)年版では「拜」の漢語サ変形「拜スル」が「拜スル[角徴]徴徴¹¹⁾」(上4オ1)のように出現し、この節博士から推定されるアクセントはLHHHである。この形をとる漢語サ変動詞の漢語部分はアクセント体系変化後においてもLHであることが想定される(上野和昭2010:65-66)。これは「拜」のアクセントをLHと推定する傍証となろう。

以上より、「声」注記によって推定される「配スル」の音調はLH××であると考えられる。

4.2.3 「晋」「親」「進退」の「声」注記音調の推定

「晋」「親」「進退」の各語に対する「声」注記は次のとおりである。

晋：花ノ^心 (『論語』18オ2)

親：手^針≠木ノ^心 (『孝経秘抄』56ウ5下)

進退：手^針≠木ノ^心 (『孝経秘抄』66オ6下)

進退：手^針 (『論語』41オ1左傍)

この注記によれば、「晋」と「心」(心部)の音調と一致することがわかる。また「親」「進退」は「手針」(手部)の音調と一致する一方で、「心」(心部)の音調とは異なることが知られる。

まず「木ノ心」「花ノ心」の「心」は、体系

変化前の『類聚名義抄』観智院本天理大学附属天理図書館蔵本における「擦心^(去)ノ^(上)ハ^(平)シ^(平)ヲ^(上)」(仏下本58オ4)の例より LH が推定されるとともに、現代京都アクセントが LH であることから、2拍名詞第4類相当であるとされる(秋永一枝ほか 1998: 110)。2拍名詞第4類は「院政・鎌倉 LH > 室町・江戸 LH 現代京都 LH」のように、どの時代でも LH であったとされる。そのため、室町時代のアクセントは LH であったことが想定される。

一方「手針」について、「手」は『類聚名義抄』観智院本天理大学附属天理図書館蔵本で「手テ^(平)」(仏下本20ウ6)、大慈院本『涅槃講式』で「手ヲ^(+斗)」(410-4, 425-5, 426-1, 431-3, 437-4)など体系変化前のアクセント資料で L を示す例が認められ、体系変化後の『平家正節』東京大学文学部国語研究室蔵本において、「手に^(×上)」(巻四下・内侍所都入2-2)などのように、助詞後接で LH (単独で R が推定される型)の例が認められる。1拍名詞第3類に属し、「院政・鎌倉 L > 室町・江戸 R > 現代京都アクセント R」という変化を経る。よって「手」は体系変化前において L であったと考えられる。

また「針」には、漢音資料・呉音資料とも次のように平声点が加点される。

(a) 漢音資料の例

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3 (1099) 年

C 種点興福寺蔵

懸^(平) 針^(平) (◎120), 針^(平) 葉^(入聲)
(◎137), 針^(平) 療ヲ (◎465)

『大慈恩寺三蔵法師伝』承德3 (1099) 年

頃 D 種点興福寺蔵

針^(平) の鑿^(くす) (◎131)¹²⁾

(b) 呉音資料の例

『法華経音訓』至徳3 (1386) 年版心空著

東洋文庫蔵

針^(平) ハリ (54-3)

これらの例から、アクセント体系変化前の「針」のアクセントは LL であったと推測される。

「手針」の室町時代のアクセントを考える場合に、アクセント体系変化前の院政・鎌倉期に複合した可能性と、体系変化後の室町時代に複合した可能性の両者を考える必要がある。

まずアクセント体系変化前に複合したとすると、LLL (「手」L + 「針」LL) であると考えられ、3拍名詞第4類相当であると推定される。3拍名詞第4類は「院政・鎌倉 LLL > 室町・江戸 HHL > 現代京都 HLL」という変化を経たとされる(秋永一枝ほか 1998: 54)。このとき、「手針」は HHL であり、「針」の部分は HL を示すと解釈される¹³⁾。

次に、アクセント体系変化後に「手」と「針」が複合したとすると、その音調型は RHL (「手」R + 「針」HL) と推定される¹⁴⁾。この場合にも、「手針」の「針」の部分は HL を示すと推定される。

以上より、「声」注記「手針」の「針」によって示される音調は HL であると考えられる。

これらの検討結果から、「晋」「親」「進退」の「声」注記音調は次のように推定される。

晋: LH (=花ノ心)
親: HL (=手針 ≠木ノ心)
進退: HL × × (=手針 ≠木ノ心)

4.2.4 「諸侯」の「声」注記音調の推定

「諸侯」には次のような「声」注記が付されている。

諸: 書
侯: 龜ノ甲, ≠請 (「≠鳥ノ鴻」は見せ消ち)
(『孝経秘抄』87オ6下)

「諸侯」の「諸」の音調は「書」のアクセントと等しく、「侯」の音調は「亀ノ甲」のアクセントと同じでかつ「請フ」のアクセントと異なることが示されている。「侯」の音調と「鳥ノ鴻」のアクセントが異なるという注記は見せ消ちされているので、注記が不適切であったと考えられる。

「甲」には「カフ」「コフ」の2種の字音があり、本稿の「声」注記の振り仮名に見られる「コフ」は呉音である可能性が想定されている(福島邦道 1966: 186)。呉音入声は低平調(LL)であったことが想定されるので、2拍名詞第3類相当の変化(院政・鎌倉 LL > 室町・江戸 HL > 現代京都 HL)という変化を経験したと考えられる。そのため、室町時代の段階では HL であったと推定される。

「請フ」は2拍動詞第2類に属し(秋永一枝ほか 1998: 191)、「院政・鎌倉終止形 LF・連体形 LH > 室町・江戸 LH > 現代京都 LH」という変化を経験したとされている。アクセント体系変化後の『平家正節』東京大学文学部国語研究室蔵本では「暇を^{上上}こ^コふとも」(巻六上・有王嶋下5-5)のように LH を示す博士が付されており¹⁵⁾、室町時代においては LH であったと推定される。

「鴻」は『類聚名義抄』観智院本天理大学附属天理図書館蔵本において和音「^コ(平) ^ウ(平)」(僧中64ウ8)である¹⁶⁾。また、『大般若波羅蜜多經』鎌倉初期点に「^{コウ}(平) ^{カン}(去濁)」(398-43-20)とあり、呉音声調は平声であったと考えられる。さらに、『蒙求』長承本平安中期朱点東京国立博物館蔵本に「^梁(平) ^鴻(平) ^五(上) 噫」(468)と加点されることから、漢音声調も平声であったと考えられる。呉音・漢音ともに LL の原音を有する「鴻」字は、2拍名詞第3類(院政・鎌倉 LL > 室町・江戸 HL > 現代京都 HL)であると推定され、室町時代のアクセント型は HL であったと考えられる。すると、「侯

ヲ鳥ノ鴻ノ声ニヨムハ・非也」(『孝経秘抄』87オ6下)としているにも関わらず、先に取りあげた「亀の甲」のアクセント HL と一致してしまうため不適切だと判断され、見せ消ちされたものと考えられる。

以上より、「諸侯」の「声」注記音調は HHL (書 H, 亀ノ甲 HL) であったと推定される。

4.2.5 「弟」の「声」注記音調の推定

「弟」には「其人ノ^{テイ}躰」(『孝経秘抄』73ウ4下)と等しい旨の「声」注記が付されている。

体系変化後のアクセント資料である『平家正節』東京大学文学部国語研究室蔵本では「^{上上}事^甲の^{上上}躰」(巻二上・祇園女御11-5)、「親父^{上上}入道^{上上}相國の^{上上}躰を」(巻九上・醫師問答2-3)、「^{上上}當世の^{上上}躰を」(巻十一下・西光被斬8-5)、「^{上上}此地の^{上上}躰^{上上} [テイ]を」(五句物・都遷28-1)のように HH と推定される譜が安定して出現する。そのため、室町期のアクセント型としては HH であったと推定される¹⁷⁾。

以上より、「弟」の「声」注記音調は HH であると推定される。

4.2.6 「謂フ」の「声」注記音調の推定

「謂フ」には「^{イフ}揖ヲスル」の音調と等しく、「繩ニテ物ヲユフ」(『孝経秘抄』64オ6下)の音調とは異なる旨の「声」注記が付されている。

「揖」は『名目鈔』尊海識語本国立公文書館内閣文庫蔵本において、「^{ユウ}(平) ^{イフ}(平)」(12ウ1)のように平声点が加点されている(上野和昭 2021: 左13によれば、内閣文庫本のほか陽明文庫本・多和文庫本・平松文庫本・神原文庫本・群書類従本にも平声点が加点されているという)。この文献における平声点は「新式声点」と解釈され、2拍名詞第2類・第3類相当の HL を表すと考えられるという(上野和昭 [2012] 2021: 231)。そのため、「揖」のアクセントは HL であったと推定される。

また「繩ニテ物ヲユフ」の「結ふ」は、「院政・鎌倉終止形 HL・連体形 HH > 室町・江

戸 HH > 現代京都 HH」という変化を経た、2拍動詞第1類に属する語である（秋永一枝ほか1998: 187）。アクセント体系変化後の『平家正節』東京大学文学部国語研究室蔵本においては「結^上フ^上ほどなり」（巻三上・少将都還32-1）のように、終止連体形に HH を示す譜が付されている。本資料は室町時代の段階であるため、「繩ニテ物ヲ^上ユ^上フ」は HH を表したと考えられる。

以上より、「謂フ」の「声」注記音調は HL (= 揖) であって HH (= 結フ) ではないということがわかる。

5. 原音調と「声」注記音調との対応

5.1 対応状況の概観

以上に述べた各語の原音調と「声」注記音調を対応させて示すと、次のとおりである（表2）。

表2 原音調と「声」注記音調との対応

番号	注	原音調	「声」注記音調
1	三年	HLLL	HL××
2	配スル	LHHH	LH××
3	晋	LH	LH
4	親	HL	HL
5	弟	HH	HH
6	進退	LHLH	HL××
7	諸侯	FLL	HHL
8	謂フ	終止形 HL ～連体形 HH	HL

表2における1～5の諸例は、原音調と「声」注記音調がよく対応しているといえ、問題がないように思われる（ただし5の例については後に検討する）。6・7については原音調と対応しておらず、8についても特殊な対応をしているといえる。以下では5～8の例について検討する。

5.2 全濁上声字における HH の保持

表2番号5の「弟」は原音調 HH, 「声」注記音調 HH で明確な対応をなす。しかし「弟」字は中国語中古音の全濁上声字である点に注目される。

全濁上声字は漢音資料で一般的に去声点が加点される一方で、経書を含む漢籍訓読資料において上声点が加点され続けることが指摘されている（佐々木勇 2009a: 859-860）。

この指摘の通り、他本での対応箇所において「弟」字には多く上声点が加点されていた。そのみならず、「声」注記音調も HH であることから、室町時代に至っても清原宣賢の経書では、全濁上声字「弟」が高平調を保ったものと考えられる。この点は、清原宣賢加点の経書において、声点を用いて明らかにされた知見と一致する（佐々木勇 [1997] 2009a: 635）。

5.3 単字声調が維持されない例

表2番号6の「進退」については、原音調と「声」注記音調に相違がある。原音調の LHLH は保たれず、「声」注記音調では HL××になっている。

漢音漢語における LHLH 型の原音調は、アクセント体系変化後に HHLL または LHLL の型を取る例が指摘されている（加藤大鶴 [2016] 2018b: 341）。「声」注記が付されていない箇所を推測して補うと、「進退」は HLLL 型をとるものと予想され、LHLH からの規則的な変化を経たとは考えられない。しかし、単字の声調は維持されていないことは確認される。

また番号7の「諸侯」について、原音調は FLL, 「声」注記音調は HHL と推定され、両者に相違がある。FLL の原音調を有する漢音漢語は HLL 型に変化するものが中心的であるとされるもの（加藤大鶴 [2016] 2018b: 303表3.15）、本稿で検討した「声」注記音調はそれと異なっている。

FLL > HHL 型に類似する変化は2字4拍の漢語において指摘されている。加藤大鶴は、HLLL 型が HHHL 型に変化した実例があることを示し、「HLLL から変化したとは解釈しにくい HHHL で対応するものがある。これらは、LLLL > HHHL の変化を経たと考えるのが自然な見方であろう」とする(加藤大鶴 [2018a] 2018b: 269)。本稿で検討した「諸侯」も FLL から直接 HHL に変化したと考えるより、LLL から HHL に変化したと考える方が原則どおりで理解しやすい。

番号6～7の例によれば、経書における漢語も単字声調が保たれていたわけではなく、漢語アクセントとして実現していた可能性が考えられる。また番号7の例より、その漢語アクセントはアクセント体系変化の影響も受けたものであった可能性も想定される¹⁸⁾。

5.4 終止形のアクセント型の維持

一方で、和語の例である番号8はむしろ古い終止形のアクセントを保持していると考えられる。古代語の終止形と連体形が合流したことにより、「言ふ」の室町期の終止連体形のアクセントとして HH が想定される。しかし「声」注記はそれを否定し、古い終止形のアクセントである HL を示すものとする。奥村三雄 [1975]: 1981: 363 によれば、平曲譜本においても、終止形を示すと思われる譜が少数残存するという。

経書に使用される語は保守的であるため、終止形・連体形の合流が訓点に反映されないことがある。そのため、かつての終止形のアクセントが保持された可能性がある。ただし、用例が1例のみであることから即断はできず、可能性を指摘するにとどまる。

6. 経書で「声」注記が使用された理由

なぜ、経書において「声」注記が使用されて

いるのであろうか。

経書以外の文献では、本稿で扱った「声」注記に類似したアクセント注記として「振漢字」によるアクセント注記があることが指摘されている。遠藤邦基 ([1987] 1989: 433) は「振漢字」によるアクセントの表示法について、「仮名に節博士や声点を加えるよりも、それ自体アクセントを反映した漢字を(万葉)仮名として用いる方がわかりやすく合理的である」とした。また、上野和昭 ([1992] 2021: 164) は、「室町期以降は四声の解釈が必ずしも定まらず、声点によるアクセント表示は混乱することが多かった」ことに、「振漢字」が使用される理由を求めるとする。

清原宣賢の『論語』は「幼童」用に加点されたものであることが指摘されている(佐々木勇 [1997] 2009a: 1029)。また『孝経秘抄』は『古文孝経』の本文を載せるものの、『孝経秘抄』自体は抄物であり、訓点の特徴も『論語』と共通する(清濁注記や、表記と発音がずれる場合の朱点などは『論語』『孝経秘抄』の両者に見られる)。「声」注記が加点される資料種を見る限り、遠藤邦基 ([1987] 1989: 433) の指摘どおり、「わかりやすい」注記として「声」注記が行われたと考えられる。

また一方で、上野和昭 ([1992] 2021: 164) の指摘にもあるように、当時声点によるアクセント注記では適切にアクセントを表しにくかったことも考えられる。本稿の「進退」(去+去)の「声」注記音調 HL ×× は、単字声調の組み合わせから想定しにくい。そのため、より正確にアクセントを示しやすい注記として「声」注記を用いた可能性もある。

このように、遠藤邦基 ([1987] 1989) と上野和昭 ([1992] 2021: 164) の想定する、両方の動機があったのではないだろうか。

さらに清原宣賢は、日常使用される漢語と同じアクセントで経書を読むべきでないと考えて

いた可能性がある。「三年」のような、その語のアクセントが自明であると思われる語にも「声」注記を付していることから、日常のアクセントとは異なったアクセントで経書が読まれていたと推測される。

7. ま と め

本稿の結論をまとめると次のとおりである。

まず本稿で対象とする経書（『孝経秘抄』所載『古文孝経』、『論語』）において使用される「声」注記が音調を示すための注記であることを確認した。

続いて「声」注記が付される各語の原音調と「声」注記音調とを調査して対照することで、次のことを述べた。

- ・全濁上声字において高平調を維持した可能性のある例があること。
- ・2字以上の漢語をなすとき、単字の声調は維持されず、漢語アクセントとして発音されていたと考えられたこと。
- ・和語のアクセントの中には、古い終止形のアクセントを維持した可能性のあるものがあること。

本稿で対象とした少数の例から、経書に見られる音調の体系全体を明らかにすることはできない。しかし、保守的な経書であっても室町時代では、平安・鎌倉時代のアクセントや字音声調とは異なっていたことが、本稿の検討によって想定される。室町時代における経書の音調を解明する手がかりとなる資料をさらに求め、明らかにする必要がある。

謝辞：本稿の結論に関連し、かつて木田章義先生が「漢籍でも出合が起こっていたに違いない」とお話しくださったことが想起される。本稿はそれを立証するものではないものの、ご指摘の可能性は更に検証すべきである。

本稿脱稿後、「其の子を言フ。」に対する「楫此声」

（『論語』1ウ6）の例に気がついた。この「楫」は「揖」と通じて使用されたものと考えられるため、当該例は表2番号8の例と同様に解釈することが可能であり、結論に変更はない。不備をお詫び申し上げます。

本稿を成すにあたり、貴重な文献の閲覧をお許しくださった大東急記念文庫の皆様に、心よりお礼申し上げます。

また本稿は平成28年度に広島大学教育学研究科に提出した博士論文「清原宣賢遺文による日本漢字音の位相論的研究」の内容を大幅に書き改めたものである。本稿は科学研究費補助金「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの拡充と運用に向けた基礎的研究」（基盤研究B・研究課題番号：22H00665）の成果の一部である。

注

- 1) 『日本書紀抄』大永6-7年写本に先立つ、『日本書紀神代卷抄』清原宣賢筆天理大学附属天理図書館蔵本（請求記号210.1イ147、4オ1-2）にも同様の記述がある。なお挙例する際、声点や清注記、節博士は^(平)^(平軽)^(清)^(斗)などのように（ ）で括って小書きで示す。引用者による注は〔 〕で括って示す。調点資料は訓読した形で挙例する。その場合、仮名点を片仮名で、ヲコト点を平仮名で訓読する。不読字は〔 〕に括って示す。原本に調点がない箇所では補読する場合には（ ）で括った平仮名で示す。返点は訓読文に反映させない。
- 2) この箇所では和語の音調を示しているため、「アクセント」の語を用いることに問題はない。しかし、後の論述の都合上、ここでは「音調」の語を使用することにする。
- 3) 中国語中古音において、「全清」は無声無気音、「次清」は無声有気音、「次濁」は鼻音等、「全濁」は有声無気音であると推定される。
- 4) 「三」が漢音で去声をとる場合、副詞的な用法（「みたび」のような、頻度が高いことを示すもの）で使用される傾向がある。たとえば、『春秋経伝集解』永正12-16（1515-1519）年清原宣賢点（宮内庁書陵部・京都大学附属図書館清家文庫蔵。声点は軽重を区別しない四声体系）を調査すると、「みたび」の意味の「三」は平声点加点例が2例であるのに対し、去声点加点例は21例得られる。一方数詞の意味の「三」は平声点5例：去声点1例であり、「みたび」の意味では去声点、数詞の意味では平声点が多い多く加点されている。
- 5) 本稿の声点認定は築島裕（1965）によっている。築島によって認定されている平声軽点も、実際には築島が平声点と認定した例と区別のない位置に加点されているように見えるので、そのようにして例外を除けばすべて平声点加点例として扱うことも可能であろう。
- 6) 元徳本も同様に去声点の加点がある。
- 7) 章母（全清）三等麻韻・平声の例も『広韻』に載るものの、漢音「シヨ」の音と対応しないため、

ここでは扱わない。

- 8) 本稿で類別語彙に言及するとき、秋永一枝ほか編(1997, 1998)所載の「早稲田語類」による。
- 9) 『涅槃講式』の節博士において「斗」はH、「十」はLを示す(金田一春彦([1964] 2005a: 202-203))。
- 10) ところが、「拜」の現代京都アクセントはHLであるので(秋永一枝ほか1997: 387)、規則的な対応をなさない。しかし、江戸時代においてLHであった語は現代京都アクセントにおいてHLに変化する傾向があることが指摘されており(上野和昭[2006] 2011: 253)、現代京都アクセントでHLをとっているのは、元々LHであったものが江戸時代以後にHLに変化したためと考えられる。
- 11) 角譜と徴譜が組み合わされている例は、[]で括って[角徴]と示すこととする。
- 12) D種点は朱点であり、影印には薄く写る。そのためこの例は影印によって確認することができなかった。当該例は、築島(1965: 312)の訓読文による。
- 13) 「針」は中国語中古音で全清字であるので、中国語中古音と日本漢音の対応からは平声軽が想定される。漢音平声軽(HL)であるとき、「手針」の体系変化前のアクセントはLHL(3拍名詞第7類相当)であると推定されることになる。3拍名詞第7類の音調型は「院政・鎌倉LHL > 室町・江戸LHL > 現代京都LHL」のように、どの時代でも同じ音調型をとるとされる(秋永一枝ほか1998: 54)。すると、「手針」の「針」の部分はHLを示すと解釈され、「針」を平声と推定した場合と同じ結果が得られる。
- 14) 「針」のアクセント体系変化前の音調型をLLと推定する場合もHLと推定する場合も、アクセント体系変化によってHLに変化することが想定される。
- 15) 当該例は終止連体形の音調型。奥村三雄([1980] 1981: 270)「取ル類(2α2)」に属し、『平家正節』に見られる「請フ」の活用は概ね「取ル類」の原則的な音調型の変化をする。
- 16) 「ウ」には鼻音を示す記号も付されている。
- 17) ただし、現代京都アクセントではHLであるという。江戸時代においてHHであったものも、現代京都アクセントにおいてHLに変化する傾向が指摘されており(上野和昭[2006] 2011: 252)、この傾向に一致すると説明される。
- 18) 表2番号4の「親」について、本稿の調査でも平声点加点点例が一定数見られた。また『古文孝経』の諸本では「親」字に平声点が加えられる例が散見される。仁治本「尊親^(平)」(193a)、永仁本「尊^(平)-親^(平)」(16オ5b)、「親^(平)」に(17オ1a)など。これをもって「親」の原音調をLLと推定することが許されれば、2拍名詞第3類(LL > HL)の変化が起こったとも考えられる。

対象資料

- 『伊勢物語惟清抄』清原宣賢筆天文17(1548)年写本、天理大学附属天理図書館蔵(913.32-イ75):天理図書館善本叢書^{和書}和書部編集委員会編(1979)『天理図書館善本叢書^{和書}和書部第四十三巻 和歌物語古註集』天理大学出版部。所在は丁数・表裏・行数による
- 『色葉字類抄』尊経閣文庫蔵前田家本:前田侯爵家原本所蔵(1926)『尊経閣叢刊 色葉字類抄』育徳財団。所在は巻数・丁数・表裏・行数による
- 『韻鏡』:龍于純校訂(1976)『韻鏡校注』第5版、藝文印書館
- 『群書治要』経部鎌倉中期清原教隆点、宮内庁書陵部蔵(550・2):尾崎康ほか解題(1989)『古典研究会叢書漢籍部 第九巻 群書治要(一)』汲古書院。所在は巻数と行数による。検索は佐々木勇(2009b)『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 資料篇』汲古書院による
- 『広韻』:林尹校訂(1976)『新校正切宋本廣韻』黎明文化事業公司。1987年の第9版による
- 『孝経秘抄』清原宣賢自筆本、大東急記念文庫蔵(22-35-44):原本調査による。所在は丁数・表裏・行数による
- 『古文孝経』建治3(1277)年金王磨点、三千院蔵:山田孝雄解題(1930)『古文孝経三千院蔵国宝』古典保存会。所在は行数による
- 『古文孝経』仁治本鎌倉中期点、杏雨書屋蔵:林秀一解題(1939)『古文孝経』貴重図書本刊行会。所在は行数による
- 『古文孝経』永仁5(1297)年写本、宮内庁書陵部蔵(503・168):「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧——書誌書影・全文影像データベース——」https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=044820(2022年8月31日閲覧)。所在は丁数・表裏・行数による
- 『古文孝経』元徳2(1330)年写本、宮内庁書陵部蔵(556・22):「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧——書誌書影・全文影像データベース——」https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=007283(2022年8月31日閲覧)。所在は行数による
- 『春秋経伝集解』清原直隆・清原俊隆加点点鎌倉中期点、宮内庁書陵部蔵(550・1):「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧——書誌書影・全文影像データベース——」https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=006680(2022年8月31日閲覧)による。所在は巻数・行数による
- 『春秋経伝集解』永正12-16(1515-1519)年清原宣賢点、宮内庁書陵部(巻2, 7278-1-556-20)・京都大学附属図書館清家文庫(巻11-30, 1-65シ7貴)蔵:宮内庁書陵部蔵本は同部提供の紙焼き写真による。京都大学附属図書館清家文庫蔵本は、「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00008066>(2022年8月31日閲覧)による
- 『大慈恩寺三蔵法師伝』興福寺蔵:築島裕(1965)『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の國語學的的研究 譯文篇』東京大学出版会。所在は巻数・行数による。検索は築島裕(1966)『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の國語學的的研究 索引篇』東京大学出版会による
- 『大慈恩寺三蔵法師伝』承元4(1210)年朱点、京都大学人文科学研究所松本文庫蔵:「東方学デジタル図書館」<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/>

M005menu.html (2022年8月31日閲覧)。所在は巻数・行数による。検索は佐々木勇 (2009b) 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 資料篇』汲古書院による●『大般若波羅蜜多經』鎌倉初期点, 安田八幡宮蔵: 東辻保和 (1971) 『安田八幡宮蔵 大般若波羅蜜多經の音注 (資料)』『訓点語と訓点資料』44, 訓点語学会, pp. 1-79。検索は東辻保和ほか編 (2007) 『安田八幡宮蔵 大般若波羅蜜多經の音注 (索引)』『訓点語と訓点資料』第119号, 訓点語学会, pp. 1-99による。所在は東辻保和 (1971) における巻数・頁数・行数による●『日本書紀抄』清原宣賢筆大永6-7 (1526-1527) 年写本, 天理大学附属天理図書館蔵 (210.1-イ151): 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編 (1977) 『天理図書館善本叢書和書之部第二十七卷 日本書紀纂疏 日本書紀抄』天理大学出版部。所在は丁数・表裏・行数による●『日本書紀神代卷抄』清原宣賢筆, 天理大学附属天理図書館蔵 (210.1-イ147): 天理図書館提供の紙焼き写真による。所在は丁数・表裏・行数による●『涅槃講式』大慈院本南北朝期写本, 東京大学国語研究室蔵: 東京大学国語研究室編 (1986) 『東京大学国語研究室資料叢書第十五卷 古訓点資料集 (一)』汲古書院。所在は複製本頁数・行数による●『補忘記』貞享4 (1687) 年版, 早稲田大学図書館蔵 (ホ02-06841-1): 上野和昭編 (2016) 『補忘記貞享版元禄版影印ならびに声点付漢字索引 影印篇』アクセント史資料研究会。検索は上野和昭編 (2016) 『補忘記貞享版元禄版影印ならびに声点付漢字索引 索引篇』アクセント史資料研究会による。所在は丁数・表裏・行数による●『平家正節』東京大学文学部国語研究室蔵: 金田一春彦編 (1998) 『青洲文庫本 平家正節』三省堂。所在は複製本所載の各巻の頁数による。検索は上野和昭編 (2000-01) 『平家正節 声譜付語彙索引』上・下, アクセント史資料研究会による●『法華経音訓』至徳3 (1386) 年版心空著, 東洋文庫蔵 (二-B-b-72): 正宗敦夫 (1934) 『倭點法華経下』日本古典全集刊行会 (現代思潮社による1978年の覆刻版による)。所在は複製本頁数と行数による●『本朝文粹』鎌倉中期点, 久遠寺蔵: 身延山久遠寺編 (1980) 『重要文化財 本朝文粹』汲古書院。所在は巻数と行数による。検索は佐々木勇 (2009b) 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 資料篇』汲古書院による●『名目鈔』尊海識語本, 国立公文書館内閣文庫蔵 (146-0567): 『国立公文書館デジタルアーカイブ』<https://www.digital.archives.go.jp/img/pdf/1216765> (2022年8月31日閲覧)。所在は丁数・表裏・行数による●『蒙求』長承本平安中期朱点, 東京国立博物館蔵 (B-3179): 築島裕編 (1990) 『長承本 蒙求』汲古書院。所在は『蒙求』の句数による。検索は佐々木勇 (2009b) 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 資料篇』汲古書院による●『遊仙窟』康永3 (1344) 年点, 醍醐寺蔵: 山田孝雄解題 (1927) 『遊仙窟』古典保存会。所在は行数による。検索は「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」<https://www2.mmc.atomi.ac.jp/~katou/KanjionDB/index.html> (2022年8月31日閲覧) による●『類聚名義抄』因書寮本, 宮内庁書陵部蔵 (A1・349): 築島裕・宮内庁書陵部解説 (1976)

『因書寮本類聚名義抄』勉誠社。所在は複製本の頁数・行数による●『類聚名義抄』観智院本, 天理大学附属天理図書館蔵 (813-イ79): 天理大学附属天理図書館編 (2018) 『新天理図書館善本叢書 第9-11巻 類聚名義抄 観智院本』天理大学出版部。所在は巻・丁数・表裏・行数による●『論語』清原宣賢点, 京都大学附属図書館清家文庫蔵 (1-66口8貴): 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00008057> (2022年8月31日閲覧)。所在は丁数・表裏・行数による

参考文献

- 秋永一枝ほか (1997) 『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版
- 秋永一枝ほか (1998) 『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京堂出版
- 上野和昭 (1992) 『アクセント資料としての神原文庫本「名目抄」について』『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』明治書院。上野和昭 (2021) による。
- 上野和昭 (2006) 『近世漢語アクセントの実態と史的 位置づけ—2拍・3拍の漢語を対象にして—』『論集』2, アクセント史資料研究会, pp. 85-114。上野和昭 (2011) による。
- 上野和昭 (2010) 『「平家正節」にみえる漢語サ変動 詞のアクセント』『論集』6, アクセント史資料 研究会, pp. 61-80
- 上野和昭 (2011) 『早稲田大学学術叢書15 平曲譜本 による近世京都アクセントの史的 研究』早稲田 大学出版部
- 上野和明 (2012) 『「名目抄」所載の漢語に差された 声点について—漢語アクセント史構築のため に—』『国文学研究』168, 早稲田大学国文学 会, 上野和昭 (2021) による。
- 上野和昭 (2021) 『名目鈔声点本の研究』武蔵野書院
- 遠藤邦基 (1987) 『振漢字による一種のアクセント表 示法—江戸初期堂上系聞書類を中心に—』 京都大学文学部国語学国文学研究室編『國語國 文』56-7, 中央図書出版社, pp. 1-21。遠藤邦 基 (1989) による。
- 遠藤邦基 (1989) 『新典社研究叢書30 国語表現と音 韻現象』新典社
- 奥村三雄 (1975) 『平曲譜本に反映した動詞のアクセ ント』『文學研究』72, 九州大学文学部, pp. 21-53。奥村三雄 (1981) による。
- 奥村三雄 (1980) 『平家正節の国語学的研究』渥美か をるほか編『平家正節の研究』大学堂書店, pp. 249-392。奥村三雄 (1981) による。
- 奥村三雄 (1981) 『平曲譜本の研究』桜楓社
- 片桐洋一 (1979) 『解題』天理図書館善本叢書と書之 部編集委員会編『天理図書館善本叢書と書之部 第四十三巻 和歌物語古註集』天理大学出版部, pp. 1-43
- 加藤大鶴 (2016) 『アクセントの体系変化前後に見る 漢語アクセントの対応—2字2拍・2字4拍の

- 漢語を中心に—』『論集』11, アクセント史資料研究会, pp. 25-58. 加藤大鶴 (2018b) による。
- 加藤大鶴 (2018a) 「字音下降拍はどのように実現したと考えるか——金田一春彦『日本四声古義』での音調推定をめぐる——」『論集』13, アクセント史資料研究会, pp. 97-122. 加藤大鶴 (2018b) による。
- 加藤大鶴 (2018b) 『漢語アクセント形成史論』笠間書院
- 加藤大鶴 (2022) 「防空自筆本『朗詠要抄』博士譜に反映する体系変化前のアクセント」『論集』17, アクセント史資料研究会, pp. 1-35
- 亀井 孝 (1969) 「口語の慣用の徴証につきその発掘と評価」『国語学』76, 国語学会, pp. 1-16. 亀井孝 (1986) による。
- 亀井 孝 (1986) 『亀井孝論文集 5 言語文化くさぐさ』吉川弘文館
- 金田一春彦 (1951) 「日本四声古義」寺川喜四男ほか編『国語アクセント論叢』法政大学出版局。1954年の再版による。
- 金田一春彦 (1955) 「古代アクセントから近代アクセントへ」『国語学』22, 国語学会, pp. 15-29
- 金田一春彦 (1964) 『四座講式の研究——邦楽古典の旋律による国語アクセント史の研究各論 (一)』三省堂。金田一春彦 (2005) による。
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房。金田一春彦 (2005b) による。
- 金田一春彦 (2005a) 『金田一春彦著作集 第五巻』玉川大学出版部
- 金田一春彦 (2005b) 『金田一春彦著作集 第七巻』玉川大学出版部
- 栗原圭介 (1986) 『新釈漢文体系 第35巻 孝経』明治書院。2018年の第13版による。
- 五島和代 (2000) 「イウからユウ (ユー) 音へ」『国語学』203, 国語学会, pp. 73-62
- 小林芳規 (1971) 「中世仮名文の国語史的研究」『広島大学文学部紀要』特集号 3, 広島大学文学部。
- 小林芳規 (2021) による。
- 小林芳規 (2021) 『小林芳規著作集 第一巻 鎌倉時代語研究 (上)』汲古書院
- 桜井茂治 (1958) 「「出合」考」—アクセント史的考察—『国語研究』7, 國學院大學国語研究会, pp. 61-77
- 佐々木勇 (1997) 「清原宣賢の漢音声調——十六世紀前半の実態把握のために——」『国文学攷』154, 広島大学国語国文学会, pp. 1-15. 佐々木勇 (2009a) による。
- 佐々木勇 (2009a) 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 研究篇』汲古書院
- 築島 裕 (1965) 『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究 譯文篇』東京大学出版会
- 築島 裕 (1977) 『国語の歴史』東京大学出版会
- 沼本克明 (1982) 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院
- 沼本克明 (1986) 『日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 沼本克明 (1997) 『日本漢字音の歴史的研究——體系と表記をめぐる——』汲古書院
- 沼本克明 (2013) 『歴史の彼方に隠された濁点の源流を探る—附・半濁点の源流—』汲古書院
- 福島邦道 (1966) 「遊仙窟の「玳瑁」の訓について」『訓点語と訓点資料』33, 訓点語学会, pp. 183-186
- 吉田賢抗 (1960) 『新釈漢文体系 第1巻 論語』明治書院。1976年の改訂初版による。